

Title	日本人キリスト者の生涯から：藤井武の場合
Author(s)	鵜沼，裕子
Citation	聖学院大学総合研究所, No.34, 2006.2 : 120-134
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4292
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

日本人キリスト者の生涯から

——藤井武の場合——

鵜沼裕子

先ほどご紹介いただきました鵜沼裕子でございます。
今日は「日本人キリスト者の生涯から——藤井武の場合

——というテーマに従いまして、お話をさせていた
きたいと思います。ちよつと気になりますのが、皆様が
お持ちのチラシです。ここに私の顔写真が載っているの
ですが、事務のほうで探してきてくださったらしく、こ
れは随分と昔の写真で、多分若い女性が来るとお思いに
なつて……(笑)、これは年齢詐称ではないかと家族の
者に言われてしまいましたけれども、実物はこういう年
寄りでございますので、申しわけございません。別に欺
く気持ちはなかつたのですけれども、こういうことにな
りました。

私が学生時代から専門としてきた研究の分野は、日本
のプロテスタント・キリスト教の思想です。ですから、
今日のシンポジウムの性格から申しますと、司会の藤掛
先生も含めまして、私一人がこの分野ではいわば素人と
いうことになるかと思ひます。しかし企画の平山先生か
ら、例年この会はこういう多様な専門外の人も呼び込む
仕方のメンバー構成でやっているのではということでした
ので、お引き受けいたしました。

私の立場からは、「悲嘆と信仰」という今日のテーマ

にかかわる一つの事例を、日本キリスト教史の中からご
紹介させていただきます。そして専門の先生方、パネラ
ーの方々によりますコメントもいただきたいと思ひま
す。また聴衆の皆様には、信仰の先達と仰がれて遠い距
離にあるような人たちにも、やはり我々と同じような悲
しみとか、苦しみ、悩みの体験があつたということを知
つていただき、彼らはそれとどう向き合つたか、それを
少しばかりお話しして、皆様方の信仰生活の養いの一助
としていただければと思つております。

用意しました資料ですが、まず別紙1というのが藤井
の略年譜になつておりまして、資料1は、矢内原忠雄が
書きました『藤井武小伝』という短い伝記からの抜粋で
す。資料の2、3、4は、藤井武自身が書いたものから
引いてきたものです。と申しますのは、できるだけ藤井
自身の声に皆様にも耳を傾けていただきたいと思つたも
のですから、全集からの文章を資料として用意いたしま
した。

I はじめに

まず、レジユメの「はじめに」というところに「私の日本キリスト教思想研究」という小見出しを掲げましたが、これは私の研究の切り口をわかっただけだと思つたからです。一口に日本キリスト教の思想の研究と申ししても、研究する者の関心によつていろいろな切り口と視点があります。

一例を挙げますと、時代の政治とか経済とか、社会思想とのかかわりから見えていくもの、あるいは教会設立の経済的基盤を分析調査するとか、天皇制とキリスト教という問題を扱う研究などがあるかと思ひますけれども、その中で私のとつてきたやり方というのは、これはもう当たり前のことですけれども、信仰というものは基本的には心の深い次元、魂の領域と申しますか、そういうところで起こるいわば霊的な体験です。ですから一人のキリスト教思想家を研究していくに当たつては、政治問題、社会問題等との絡みを見ていくことはもちろん

ん大事なのですが、まずそれに先立つてその人の心の世界のありようというものに迫つてみるのが基本となるのではないかと考えております。

その場合に、では心の世界とどういふことかと考えたとき、キリスト教とは直接関係のない分野の学問成果から示唆を得ることが多くありました。それは、カウンセリングとかそういう方面の方のお書きになつたものです。そのぎつかけですが、私は五十歳を過ぎて初めて大学の専任教員というものになりました。それでいろいろな悩みを抱えて来る学生たちと向き合わなければならぬことになりました、もちろん専門的なトレーニングを受けたわけではないのですが、興味を持つて一般向けに書かれた臨床心理学関係の本を幾つかひもといてみました。ところがそこで語られていることに、必ずしもキリスト教的立場の先生がお書きになつたものではないにもかかわらず、キリスト教の世界で例えば説教などを通して語られていることと符合することが極めて多い。そのことに、私は衝撃に近い驚きを覚えたという体験がありました。

一例を挙げさせていただきますと、ある臨床心理学者の書かれた青年の心理に関する本でしたが、『大人になることのむずかしさ』という本で、大人になっていくときに何が必要か、大切なことは自分のコントロールを超えた存在、自分で勝手に動かすことのできない存在を認識すること。それとの関連で自分という存在を考えてみることができるとのことなのだという言葉がありました。それ一つではないのですが、非常に興味深く思われました。この「存在」というものをそのまま聖書の「神」と言いかえてもおかしくないように私には思われました。そこで、いわゆる広い意味の心の世界に関する学問から得た知見に教えられながら歴史上のキリスト者に近づいてみる、これが一つの切り口になるのではないかということを考えました。大変口幅つたくて、お恥ずかしいことですが、そういう意味では私のしてきた研究は、本日の企画と全く接点がないというわけではないかなと思っております。

ただ、今日は平山先生も石原謙という、もう故人になった人物を取り上げられますけれども、カウンセラーが

クライアアントと向き合うときのように、現実には過去の人と対話することは不可能ですので、私どもの研究の世界では文献を、その人が書き残した文章を読み解いていくということが基本的な作業となります。今日はそのような意味もありまして、少し藤井の文章からの抜粋を用意してまいりました。

まず、なぜ藤井武か、ということですが、平山先生から今日のテーマ、「悲嘆と信仰」というのを示されたときに、真つ先に私の頭に浮かんだのが藤井武の名前でした。その理由というのが、とりあえず二つあるのですが、第一は後で申し上げますけれども、妻の非常に若過ぎる死から、信仰的にも人間としても極めて深刻な喪失感を体験している人であるということです。そして、その体験をくぐることを通して、独自の信仰の深みに達した。その二点を、今日は特に取り上げてみたいと思えます。

もちろん悲嘆を味わったキリスト者といえば大勢おられます。まして、内村鑑三などもいろいろ本に書いておりますし、むしろ悩みとか悲しみ、挫折を知らないキリスト者を探

すほうが難しいかもしれません。しかし、藤井武という人の生涯はまさに悲嘆の生涯と言つていいほどのもので、この悲嘆が持つ意味を考えずには藤井武の信仰や思想を理解する、読み解くことはできないと思います。今日はそのような藤井における悲嘆と信仰を私なりに整理してご紹介し、皆様がテーマについてお考えになるご参考にご供したいと思ひます。

Ⅱ 藤井武について

藤井武という人の知名度はあまり高くないので、ご存じない方もいらつしやるかと思いますが、内村鑑三門下のいわゆる二代目の無教会キリスト者と言われる人です。無教会についてはレジュメに簡単に書いてあります。これもキリスト教に親しんでおられる皆様には蛇足と思ひますが、無教会の核のようなものを三つ取り出してみました。「キリストの十字架による贖罪への信仰」、「聖書のみを拠り、制度・儀式・信条等を「否定」、「教会によらず、個人雑誌、集会によつて信仰の維持・育

成・伝道を行う」の三つです。内村鑑三に始まる日本で生まれた独特なキリスト教の形態と言われております。指導者が非常に重要な意味を持ちますので、指導者によつて重点の置きどころや指導の性格も変わりますけれども、一応共通する特色を取り出しますと、最大公約的なこととして、この三つが挙げられるかと思ひます。

まず、藤井という人はどういう人かということを経年譜に沿つて簡単に説明させていただきます。今日の話にかかわることだけをピックアップして申し上げたいと思ひます。

藤井武は一八八八(明治二一)年に生まれ、一九三〇(昭和五)年に没しています。最初の姓は浅村といひましたが、一九〇一(明治三四)年に父親の友達の藤井鉄太郎という人の養子になります。それは実父が大変重い病氣にかかつたので、せつかく才能のある人が芽を伸ばすことなく過ごさねばならないのは忍びないから、自分が引き取つて教育しようということだつたらしいのですが、幸か不幸か、実父は元氣になつたので、養子にやらなければよかつたと言つたそうです。しかし実際は実家

に住んで、晩年にも実家の両親が近くに住んでいたということでした。ですから、戸籍上の養子縁組であっただけと理解してよいと思います。

そして一高、東京帝大という秀才コースを歩みましたが、一九〇八(明治四一)年に、西永喬子(のぶこ)という一五歳の女性と婚約します。武本人は二一歳でした。洗礼を行わないという無教会の性格から申しまして、彼がいつごろ信仰に入ったかという明確な時を定めにくいのですが、矢内原の伝記や自伝によりますと、大学時代、一九〇九(明治四二)年に内村鑑三の集会に列するようになったと書かれております。当時の大正教養主義とか、そのころ生きた青年たちに共通することとして、自我とは何かとか、そういう非常に内省的なテーマの問題に悩むというところから、キリスト教だけでなくいろいろな文学作品にも親しんでいる。明治の内村に代表される世界の、天下国家のためというふうな気概を持っていたのは、非常に対照的かと思えます。

大学卒業後、内務省のお役人になりましたが、これは意図して選んだ職業というよりは、最初から先生である

内村に、先生のようなことがやりたい、つまり伝道がしたいと相談したところ、内村から、何をやるにしてももっと人生を知らなければだめだと言われ、十年ぐらい社会勉強をすべきなさいと諭されたそうです。しかし、実際には官吏生活五年で退きまして、伝道一筋の生活に入ります。

そのきっかけになったのが、一九一三(大正二)年に妻の喬子が腸チフスで生死の境をさまようという重態に陥り、そこから奇跡的に立ち直った。そこで、夫妻でキリストへの献身を誓ったということです。しかし、その後すぐに伝道に転身したわけではなく、なおその後五年ばかり役人、官吏生活が続きますが、一九一五年(大正四)年に辞表を提出して、無教会の形態である文書伝道に専念するために上京して、内村鑑三に迎えられることになりました。無教会の伝道形態ではそれぞれのリーダーが個人雑誌を出しますが、藤井は一九二〇(大正九)年に「舊約と新約」という雑誌を自宅を事務所として創刊しております。

子供は、二人の男の子と三人の女の子、五人の子女に

恵まれたということです。一九二二（大正一一）年一月に次女の園子が誕生しましたが、その年の一〇月に妻の喬子が二九歳という若さで亡くなっております。五人の幼い子が武の手元に残されました。また後でこの辺の状況にもう少し詳しく触れたいと思いますが、武自身はその後八年ほど生きますけれども、お骨を葬らずに、終生、書斎の机の上に置いたというのが有名なエピソードとして語られております。

そして、「^{こいっぴ}羔の婚姻」という、ちよつと神秘主義的な傾向の、大変長い詩を発表しますが、これが完成しないうちに自分も病に侵されて亡くなることになりました。

一九三〇（昭和五）年三月一日に近くに住んでいた実父が亡くなり、間もなく師の内村鑑三も亡くなり、同年の七月一四日、胃潰瘍——これを長く持病として患っておりましたが、自宅で突然の吐血を起こして数日の患いで亡くなりました。このとき、長男の洋が一八歳、そして妻が亡くなった年に生まれた三女が八歳でした。

信仰の特色については、今日はちよつとそこには立ち入らないことにします。基本的には無教会の信仰を受け

継いでいたと、そのように受けとめていただければよいかと思ひます。

Ⅲ 藤井武にとつての悲嘆

私は関先生のように悲嘆はなぜ起こるか、その性格の分析などは全然考えずに、ただ悲しいことと単純に受けとめて話を進めておりますけれども、藤井武にとつての悲嘆というのは何だったのかということをご理解いただくために、まず結婚生活のことをちよつと申し上げたいと思ひます。先ほども申し上げましたが、妻の喬子が死んだことにより、藤井はちよつと異常という表現が適切かどうかわかりませんが、非常な悲しみ、喪失感を味わう。それをまた表明しています。それほどまでの悲しみ、喪失を理解するには、彼にとつて妻が何であつたかをまず知つておくことが必要かと思ひます。

これは資料として用意いたしましたが、藤井が自分で結婚について自叙伝の中で書いています。その一部をちよつと読ませていただきます。まず、一五歳と二

一歳で婚約関係になつたというのは、全く当時のしきたりどおりで親同士が決めたことであつて、それまでは何もロマンス的なことはなかつた。その次ですが、「然るに時は来た。私はあたかも睡ねむから醒めたもののやうに、自分の側にひとりの女性があるのを見た。彼女は私の半身として永遠に私に与へられてゐるのであつた。彼女は私のものであり、私の骨の骨、私の肉の肉であつた。私はそれをいと不思議なことに思つた。おおよそそういう結び付きといふものは、よく考へてみれば、この現実の世にあつては余りにも神秘的な事に属する。それは地の事ではなくして天の事である。それは血肉の事でなくして靈の事である。それは人の事ではなくして神の事である。素よりみな人のする事ではあるが、従つて、死と共に人生最もありふれた経験ではあるが、併し結婚は単に自然の世界の出来事ではない。結婚は超自然の国、道德の国、神の国においての聖なる事実でなければならぬ。

このやうにして私はみずからの実験をもとに、初めから結婚の神聖を思はせられた。多くの人にはそれを得るまでが甘き夢であり、一たび得てはたちまち幻滅の悲哀

と化するところのものが、私には却て正反対であつた。私にはそれを得るまでは何でもなかつた。さうして一たび得てからは、それは純金にも蜂の巣の滴りにもくらべがたき、慕ふべく甘きものであつた」といふやうに、結婚の神秘性ということについて気持ちを包まずに語っています。

後に「羔の婚姻」という最後の作品の中で、イエスキリストを新郎としての羔、そしてエクレシア、教会というのは無教会ですから、いわゆるこの世の教会というよりも信徒の集団ですが、これを新婦になぞられております。神と教会との二者の聖なる結婚、婚姻によつて宇宙の目的である神の国が実現するという、非常にミステリアスな秘儀的な主題を持つ長詩を書いています。神と教会の結婚という秘儀は現実の男女の結婚にもまた同様に当てはめられて、男女の結婚もやはりそのような秘儀的な結びつきであるといふやうにいつています。

この、妻の死の直後に書き出した「羔の婚姻」という詩の序文ですが、そこにはこう書かれております。「彼女は真実に私の骨の骨、私の肉の肉であつた。——而し

て今も尚さうである。ただ肉体に於てのほか彼女と私とを区別することは如何なる意味に於ても不可能であつた。我等の生活は唯に共同のものではなかつた。それは二人の生命の完全なる交織であつた。私の呼吸の一つ一つに彼女の氣息が通うて居つた。彼女の脈拍の一つ一つに私の心臓が鼓動して居つた」。これは決してオーバーな表現ではなくて、彼にとつて妻というものはそのような存在であつたようです。

妻が彼にとつてどのような伝道の具体的な支えであつたかといふと、矢内原の小伝に、山なす家事育児とか、雑誌の発行、すべてを軽々とやつてのけた、とあります。肖像写真が全集に載っていますが、非常に純粹で高貴な感じのする美しい方です。

そのような妻が突然奪われた。それが彼にとつてどのような痛み、悲嘆を意味したかということが、同じく「羔の婚姻」の序文の中に書かれております。これも読むのは時間がかかりますので、冒頭は『エゼキエル書』の引用から始まり、二ページ目に悲嘆の情が出ておりますので、そこだけちよつと読ませていただきます。

「嗚呼、我が妻は遂に逝いた。私は正直に告白する、私の悲しみは実に無限であることを。

かくまでに大なる悲しみは私の薄信によるのであるか。或は然らん、併し致方がない、事実である。

私は基督者なるが故に又は伝道者なるが故に、彼女の死を悲しんではならないのか。もし然らば私は願ふ、再び基督者たらず伝道者たざらんことを。私は何であるよりも先づ人でありたい。願はくは私をして泣かしめよ、彼女を思うて心のままに泣かしめよ。

嗚、彼女は何故に癒されなかつたのか。或は我等は最早や用なき者として棄てられたのであるか。或は私の祈りが足りなかつたのであるか。或は何か他に特別のみどころがあつたのか。私には解らない。信仰の友人等は私を慰めんが為に種々なる説明を提供してくれる。私は感謝してそれを受ける」。ちよつとヨブの友人のような立場かと思ひますが。「併しながらなほ私は思ふ、みこころは余りに深くある。「今わが知るところ全からず」人は今凡てを知ることが出来ないのである。多分私の世にある限り、私は彼女の癒されざりし全き理由を知るこ

とを許されないのであらう」。そのように言っています。いかに悲しみが深いものであったか、断腸の思いが伝わってくるような気がします。

彼の有名なエピソード、なぜ妻の遺骨を葬らなかつたのかということに関してですが、これはちよつとまた戻りますが、矢内原の小伝によりますと、「彼は遺骨を葬らず、終生書斎の机上に置いた」。そして、「共に葬られようといふことを、彼は病中の妻と約束したのであるといふ」とあります。

私が全集等を読んだ限りでは、本人はこのことについて、なぜこうしているのかというようなことは書いていないようです。小さい子供を亡くした母親が部屋を散らかつたままにして、だれにもさわらせないという話をよく聞きますけれども、いくら約束とはいひましても、骨をしかも机の上に置いておくというのは、考えようによつてはちよつと異常とも思えるような気がします。しかしこれはやはり藤井の心の中に寄り添つてみれば、骨の骨であり肉の肉で、もう呼吸、血管もつながっていたよくな妻の体の一部を身近に置くことなしには、藤井のそ

の後の生というものはあり得なかつたということかと想像します。それからプロテスタント、特に無教会では死者儀礼をいたしませんから、そういうことで気持ちの整理が儀礼によつてつけられなかつたということも多少関係しているのかと考えたりもしました。

IV 藤井武における悲嘆と信仰

では、藤井は信仰によつて「癒された」のかという問いを立ててみました。まず悲しみと癒しについて考えてみますと、私の考えたところでは、癒しということを苦しみがやわらぐこととか、あるいは心が楽になる、そういう意味で語るとするならば、藤井はその後、自分自身が死ぬまで、つまり八年間、癒されることはなかつたと言つていいのではないかと思ひます。遺骨をずつと机に置き続けたということもそのことを語つているかと思ひますし、もしかしたら遺骨を葬る気になつたときは、心の整理が常識的な意味でついたときかなと思ひます。しかし藤井の場合、神様、イエス様といつてすごること

癒されるよりは、逆に彼は信仰者であるがゆえの苦しみと戦わなければならなかったということが、書き残したもののから読み取れるように思います。

それを藤井自身の言葉から引いてみます。ちよつと時間がありませんので、後半だけを読みますと、「しかし（妻の病を癒して欲しいという）私の祈は遂に聴かれなかつたのである。私はつまずき告白する、その時以後暫くの間、私は祈に疲れ果てて、また祈らうとする心を起し得なかつたことを。私は私の祈が（病そのものの癒しとは）別の意味に於て聴かれるであらう事を疑はなかつた」。悲しみをくぐつての恵みが来るということを疑わなかつた。「しかし別の意味は別の意味である。私の当面の願ひはそこにはなかつた」。つまり、亡き妻が肉体において癒されてほしかつたと言うのです。「私は私の言葉を以て表はした通りに事の実現を許していただきました。これはかたい信仰者としては、まさに絶望の言葉と言つてよいのではないかと思います。

「十月一日感話」という作品があります。これを見ますと、死なない、死なないと思つていた私の予想は裏切られた。「神は今彼女を取り去りたまふ筈がないと信じ切つてゐた私の信仰は、見ごと裏切られた。私は神を見失うた」。彼は考えます、妻が死んだからといつて、どうしてそう慌てなければならぬのか。それでどうするつもりかと。「併しどうすることもできないのが事実であつた。祈ることさへ今は不可能であつた。自分では、余りに今まで祈りつづけた為に、たましひが祈りに疲れたのであらうと思うた」。神を見失ひ、もう祈ることも不可能であつた。そこまで崩れてしまつたということ、包まずに書いています。

ちよつと余談になりますが、学生にキリスト教のことを話すときに、今はいろいろなカルト宗教などの影響で宗教に対する誤解と云いますか、近づいては危ないものというふうなイメージが広まつているのですから、宗教とはどういふものだと思うかという、もうこれは深い意味ではなく、思うことを書きなさいというのですが、大方の学生は、苦しいときに頼るもの、あるいは弱い人

間がすぎるものということを書いてきます。これは聖学院の学生に限らず、一般の日本人が「苦しいときの神頼み」という言葉に象徴されるように、宗教に求めているものを代弁していると思います。

ところが、内村鑑三の『基督信徒のなぐさめ』という本を学生と一緒に読んだときに、ある感想の中に、宗教というのは弱い人間がすがって支えになるものだと思っていたけれども、逆に信仰者ゆえの苦しみとか、悲しみというものがあるということを知ったという言葉が出きました。内村の場合には『基督信徒のなぐさめ』、これは不敬事件の後の苦境を下敷きにしていますが、その中で妻が死んだのは、自分の祈りが足りなかったからではないかというふうに自分を責めているくだりがあります。同じように藤井もまた、こういふときこそ神様にすがるといふより、むしろ逆に信仰者であるからこそ苦しい、つらい、悲しいことをくぐつたということだと思いません。

しかし、藤井はそれでは生涯嘆き悲しんで神を見失い、祈れぬままに終わったかというところではなく、か

えつてこの期間をいわばバネとして、信仰が深められていく、深化していく、深化されていく軌跡、心の足跡を読み取ることができないのではないかと思います。

もう資料を読んでいるいとまがありませんので、ここでもまた余談になりますけれども、私自身が母を亡くしたときに心身のバランスを完全に崩した時期がありました。そのときに私の中学時代からのやはりキリスト者の友人が、非常に慰めてくれました。さりげないはがきをたびたびくれたのです。その中に創造の「創」という字、創るといふ字について書いてありました。それは、この字には「ぎず」という意味もある、ということでした。絆創膏ばんそうこうとか満身創痍などというときに使います。つまり「ぎず」というのが創造につながる、ということが書いてありまして、私の心にはつとひらめくものがありました。これを当てはめると、藤井は妻の死から受けた「ぎず」で、信仰の新境地を創造したといふふうに見えるかと思えます。

ではそれは、どういう境地だったのでしょうか。矢内原の小伝のほうでは、最後のところの終わり近くに「妻

を失ひたる彼は、己れが人間中の最も弱き人間であることを見出した」。さらに「十字架の信仰に、神を絶対に義とする信仰に徹底した」とありますが、これが藤井の信仰的創造の核心部分を簡潔に語っていると言つてよいかと思ひます。つまり、自分というものを全否定して、神様がなされたことをすべて絶対の義として受け容れる信仰です。そういう境地に達したということ。

それからもう一つ、「羔の婚姻」にうたわれているような神秘主義的とも言える一つの信仰の境地、これも彼が「ぎず」を通して達した信仰ではないかと思ひます。

それが藤井自身の言葉で語られているのが「十月一日感話」というものですが、これはそれほど長い文章ではありませんので、『藤井武全集』の十巻をぜひごらんいただけたらと思ひます。実はこれは妻が亡くなつてから六年たった日に書かれているのですが、悲しみの緊張感が全然緩んでいないという印象を受けます。本当に妻の死の直後の悲嘆、そのどうしようもない悲しみがそのまま六年間持ち続けられたという印象を私は受けました。

そして、自分は最も弱いものであるということ、そこ

からキリストを発見し神を発見したというその心の足跡が、藤井自身の言葉で語られていますので、後で配付資料をお読みいただければと思ひます。

長詩「羔の婚姻」の創作は、独白によつて自分の持つてゐるものをすべて吐き出すという独特な癒しの効果も持つていたように思われます。

まとめに代えて

——藤井武の生涯が語るもの

「羔の婚姻」を読みながら、藤井はこれほどの悲嘆をずつと持ち続けながらも、なぜ崩れて自死することがなかつたのかということを考えてみました。これはもしかしたら藤井本人にとっては縁のない問いかもしれないのですが、そういう疑問を持った理由は、状況は全く違うのですが、藤井とほぼ同世代のキリスト教の指導者で教会形成をした高倉徳太郎という人がいます。この高倉徳太郎は、最後は自死で終わつてゐるのです。

ほぼ同世代のキリスト者にそんな例があるのですか

ら、なぜ藤井は自死しなかつたのか、という思いがふと浮かんだのです。これは後で先先生方のお考えを伺いたいところですが、結論を急げば、やはり悲しみの極みに到達した信仰が彼の悲嘆に打ち勝つたということかと思えます。つまり妻を召されるということ、すべてを含めて義は神様にあるという信仰の境地に達することができた。これがやはり藤井を支えた究極のよりどころではなかつたかと思えます。

悲嘆そのものは和らぐことはなくて、その意味で藤井は癒されることはなかつたと思えますが、この信仰を通して、祈れないとか、なぜ神様はこんなことをなさるのですかというふうに訴えなければならぬ苦悩から解放されたという意味で、彼は究極の癒しに達することができたのではないかと考えております。これが一点です。

もう一つは、「羔の婚姻」という詩を書いたことの意味です。これは全体としては一つの構成はあるのですが、れども、それぞれの歌は非常に吟味されて練り上げられているというよりも、胸のうちにあるものをそのまま吐

き出しているという印象があります。すべて心の中にある思いを書く、詩にして吐き出すという行為そのものが彼を悲嘆のどん底で支えていたのではないかということ考えたのですが、これはご専門の先先生方のコメントをぜひいただきたいと思えます。そして絶望、死という最悪の道をたどることから、彼を救い出した一つの手だてという意味を持つたのではないかと考えました。

最後に、最初に申しましたことですが、藤井に限らず歴史上著名なキリスト者の方々はそれぞれ大きな悩み苦しみを経ている。それとどう向き合つたかということ、一人一人のキリスト者から聞くということは、高いところから語られるお説教とはまた違う意味で、同じ福音を指して歩む私たちにとつての信仰の養いになるのではないかと考えています。どうも時間を超過して失礼いたしました。ありがとうございます。

司会 どうもありがとうございます。鶴沼先生の発題も一冊の書物になりそうぐらいに大きく、深い話でし

たが、それをコンパクトにまとめていただきました。また発題中に、藤井武がなぜ妻の遺骨を埋めなかつたのか、なぜ自死に至らなかつたのかということ、ほかのシンポジストの先生にも感想を聞きたいというお話がありましたので、後半のディスカッションの時間には各先生方にコメントとしていただければと思っております。またヨブ記のヨブの友人たちの助言の話を取りあげられました。関先生の発題にも出ていましたけれども、鶴沼先生の中でも切り口は違いますが、同じような事柄として出てきました。本当に悲しむべきものを悲しんだ、そういうエピソードであつたのだなと教えられました。

それでは、三番目の発題者として平山先生からお願いいたします。